シャイニーランド

じてんしゃ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どうしても強くなりたい。私の居場所（シャイニーランド）を守るために。

学校にも家庭にも自分の居場所を感じられず、空虚な日々を送る高校生・風野灯織。

そんな心の隙間を埋めるように練習にのめりこみワンツーを覚えた灯織は、夜の街の戦いに身を投じていくこととなる。

果たして灯織は自分の居場所、シャイニーランドを見つけることができるのか……？

目次

第一話：風野灯織 ―― 1
第二話：風野灯織② ―― 9

第一話：風野灯織

「ねえねえ、この動画見た？」
「ああそれ？見たよ。ていうかＹｏｕＴｕｂｅにもめっちゃ転載されてるし」
「やっぱり？私も昨日ＹｏｕＴｕｂｅで見たんだけどさ……これってウチの女子の制服だよね!?ほら、こっちの女の子の方！」
「そう見えなくもない……かな？画質悪くて顔もよくわかんないけど……」
「でも、本当にすごいよね！だってこの子、自分より大きい相手を倒しちゃうんだもん！」
　朝のホームルーム前の教室の片隅に集まって話す女子のグループ。その中の一人の手に握られているスマホに移っているのは、「格闘家の男と素手で渡り合う女子高生」の動画だった。いわゆるストリートファイトというやつだ。二日前に渋谷で撮影されたらしく、ＳＮＳで拡散され、すっかり話題の動画になっていた。
「ねえ、めぐる、ボクシングやってるんでしょ？やっぱこの子って強いの？」
「うーん……」
　そのグループの一人、めぐると呼ばれた金髪の少女は動画を何度も巻き戻しながら、集中した面持ちで動画内の少女の動きを見つめる。画質が荒いうえに、かなり遠くから望遠で撮影されたものなのだろう。見づらいことこの上ないが、大まかな動きを把握するくらいはできる。そうして動画を一通り見終えためぐるは、昨日、自宅のパソコンで同じ動画を見たときの高揚を思い出し、しかしそれを表に出すことなく結論を告げる。
「……メチャクチャ強いよ。この子。相手も最初は油断してたっぽいけど、この体格差で対等に戦えるなんてどう考えても普通じゃない」
　めぐるが一番最初に注目したのは、少女と男の対格差だった。少女と向かい合っている男は１９０センチはありそうな巨漢で、その体は太くたくましい。そして動きからわかる通り、確かに素人ではない。

察するに総合格闘技かなにかの経験者なのだろう。対する少女は細身で、身長も１５０台中盤といったところだろうか。両者の身長差は約４０センチ。体重差は考えたくもないが、二倍近く離れていてもおかしくない。少女に不利な要素しかない戦いだ。しかし少女は素早いフットワークでヒットアンドアウェイを繰り返し、的確に打撃を与えていく。男の打撃はかすりもしない。少女の体を掴もうとする男の腕も空を切る。全てギリギリのところで躱されてしまう。

そうこうしているうちに、男の腿へ蹴りが入る。もろにくらった男はたまらず膝をついてしまい、ちょうどいい位置へと下がった顔面へ間髪入れずのワンツーが叩き込まれる。そうして男が放心した隙に少女は踵を返して逃走を始める。スマホで撮影しているであろう撮影者の手も動いて画面内に少女を収めようとするが、間に合わない。そのまま少女がカメラ外まで走り抜けたところで動画は終了となる。

「特にストレートの鋭さ、はっきり言って私と同じくらいだと思う」

「まじ？めぐると同じって、全国レベルってことじゃん！」

「うん。でないとこんなに体格差のある相手に上手く打撃を効かせることはできないよ」

めぐるは先ほどの動画の少女を脳内に思い浮かべる。身長は多分１５０台前半から中盤くらい。体つきはかなり細い。顔はわからなかったけど、髪は結構長かった。さっきの動画からわかる外見上の特徴はこのくらいだろうか。

だとしたら、大体あんな感じか。

めぐるは教室の窓際一番後ろの席へ視線を向ける。そこに座っているのは、めぐると同じクラスの女子・風野灯織である。めぐるはクラス全員の顔と名前を憶えているが、このクラスの半分くらいは彼女の下の名前を知らないのではないだろうか。そのくらい彼女は目立たない。友達もいないようで、めぐるは彼女が誰かと談笑しているところを一度も見たことがない。ひとりでいる時間を邪魔されたくないのだろうか。普段は本を読んでいるか、イヤホンで音楽を聴いてい

ることが多い。見た目はかわいらしいのにもったいない、と思わなくもない。
「そっかあ。すごいんだね、この子」
「一般人にしかみえないのに……」
「ウチの高校にいるんでしょ？サインもらえないかなあ」
「こんだけ強いんだしボクシング部の誰かじゃないの？」
　友人たちも少女の正体が気になるようだ。やはりボクシング部か、そのあたりを疑うのが当然の思考だろう。しかし部活動に所属している人間が喧嘩沙汰を起こすのは、部全体の大会出場停止のリスクがつきまとう。単独行動をしている人間の方が喧嘩に対する精神的なハードルは低いはず。となれば無所属の人間か。めぐるは数舜悩んだのち、そういえば風野さんは部活に入っていなかった、ということに思いあたった。めぐるは一度思い込むと、そのことをずっと気にしてしまうという癖がある。灯織と動画の少女を結び付けようとして、ありもしない証拠を探そうとしてしまっている。というか、あの程度の外見的特徴であれば、条件に当てはまる人はこの学校内だけでも無数にいる。めぐるが灯織だけを特別に気にする理由はない。
「ねえ、めぐる？」
「あっ……ああ、いや、ボクシング部は違うんじゃないかなあ？」
「そう？まあ、めぐるはジム通いだからわかんないよね」
「あっはは……そうそう」
　でも。あの動画の少女は身長と比べて手足が長かったように見えた。そして風野さんも、実は身長のわりに手足が長かったりする。もし風野さんがストレートを打ったとして。もしも風野さんがまっすぐ手を伸ばしたら、大体あんな感じなんじゃないか。考えすぎかな。考えすぎだろうな。そもそも、あんなに真面目で大人しい風野さんがストリートファイトなんて想像できないし。
　自分の中でそう結論付けためぐるは友人たちの輪から離れ、自分の席に戻っていく。すると視界の隅に、青白い顔で席を立つ灯織が見えた。めぐるは驚いて思わず声をかける。
「風野さん大丈夫!?もしかして貧血!?肩貸そうか？それとも……」

「あ、八宮さん……私は大丈夫だから……」
「でも……！」
「大丈夫だから！今は放っておいて……！」
「あ、ごめん……」
　めぐるの静止を振り切り、灯織はそのまま教室を出ていってしまう。
　無理やりにでもついていけばよかったかもしれない。しかし、あんな切羽詰まった顔を見せられてはそうすることもはばかられる。心配になって廊下を覗いてみるが、灯織の背中はもう見えなくなっていた。
「風野さん、本当に大丈夫かな……」
「めぐるー！今日の宿題やってくるの忘れちゃったー！見せて――！」
「ええ!?ちゃんと家でやってきなよー」
「お願いします！ジュース買ってあげるから！」
「しょうがないなあ、今日だけだからね」
「やったー！ありがとう！めぐる様っ！」
「もー……」
　風野さんも大丈夫だよね。休み時間とか、帰る時に話しかけてみようかな。
「めぐる様ー！はやく見せて――！」
「わかってるよー！」
　登校してくる生徒で、教室や廊下もあわただしくなってきた。その喧騒に負けない大声で友人の呼びかけに答えながら、めぐるは教室へと戻っていった。

「まずい……どうしよう……！」

灯織はトイレの個室でスマホを握りしめ、叫びだしたくなる衝動を必死に抑えながら震えていた。その画面に開かれているのはＴｗｉｔｔｅｒであり、二日前の自分の愚行が何度もリピート再生され続けている。

「まさかあの喧嘩が拡散されるなんて……普通思わないじゃん……！」

ただ一つの救いと言えば、遠くから望遠で撮影されていた上に画質が悪すぎて、顔が全く判別できないということだ。動画の画質を良くする機械とかに通されれば身バレしてしまうかもしれないが（そもそもそういう機械があるとすればの話だが）、この動画だけではせいぜい髪の長さと制服くらいしかわからないはずだ。でも警察ならわかっちゃうかも。警察が来たらどうしよう。いきなり退学なんてことになったら最悪だ。でもそんなことにはならないと思う。いままで勉強も真面目にやって来た。情状酌量の余地はある。いや、そもそも仕掛けてきたのは向こうだ。こちらが被害者であることに変わりはない。あの場には櫻木さんという証人も居たわけだし。少なくともこっちが１００％悪いなんてことには絶対にならない。絶対にならない。絶対ならないはずだ。

「そのはずなんだけど……何かあったらどうしよう……お父さんごめんなさい……」

灯織は不安で押しつぶされそうになり、力なく頭を下げる。その拍子にＴｗｉｔｔｅｒのリプライ欄が目に飛び込んできた。

・なにこれ特撮？

・これガチのストリートファイトだったの？なんかの撮影だと思って素通りしてたわ

→オレ最後まで見てたけどマジでやばかった。女の子高校生？制服着てたし

→結構かわいいよな

→わかる　俺かなりタイプ
→ロリコンか？キモいぞ
→画質悪すぎで顔全く見えないんですが
→いやこの子は絶対可愛い　俺にはわかる
→オレ現地にいたけどすげえ可愛かったぞ　連れの子も可愛かった
→おじさんきもいよ！
→俺も不良になればＪＫに殴ってもらえる……？
→最後逃げたの正解だったと思うわ　あれ以上続いてたらどうなってたかわからん
→男の方が？
→やめたれｗｗｗｗ
→死体蹴りはＮＧ
→わかる。動画見る限り戦闘スタイル完全に空手パイロットアルファだしな
→ちょうどあの子くらいの世代だし影響受けてるのかもしれませんね
→アルファのストーリーはゴミ　デザインは過去最高
→動き方がアルファのスーアクみたいってことか　確かに似てるな
→かわしまくってカウンターするやつだろ？言われてみればそれっぽいな
→こんだけ体重差あんだからそれしかないだろ
→逆にそれ以外無理そう
・男の攻撃全然当たってなくて草
・街中でこんなんやって大丈夫？逮捕とかされない？
→警察来たの３０分後とかだし事件性ないとみなされたんかね？
→ありえる　通報理由騒音だしな
→そこにいたやつら全員喧嘩見てて通報しなかっただけだろ
→女の子の方は中学か高校っぽいし大丈夫だろ　男の方は知らん
→男の方に仲間いたし正当防衛じゃね　法律とかよくわからんけ

ど

・ちょっとカッコよくね？俺も今日から筋トレするわ

→俺も始めようかな

・男の身長１９０くらいか？結構でかいな

→ちなみに女の子の方は映りこんでる自販機の高さから考えると多分１５０ちょい

→身長差えげつなッ！

→身長差４０センチとかもう大人と子どもじゃん

・体格差ありすぎてかわいそうだと思ってたら女の子の方がダウンとって勝ち逃げとか草

・年下の子にあんなんされるとか男が可哀想すぎてもうね……

・これ男の方気絶してんの？

→オレ戦ってるとこ生で見てたけど完全な気絶じゃない　軽い脳震盪っぽかった

→パンチがアゴに入ったとかそういう感じか

→ええ……大丈夫なんすかねえ

→アレは男が１００パー悪かったから

→最初から見てたんなら助けてやれよ

→仲間来てたし大丈夫だろ

・だれも言わないけど男の方もかなり強そうじゃないか？

→（年下の身長差４０センチの女子に負ける男の強さに価値なんて）ないです

→やめたげてよお！

→多分男の方も総合かなんかやってる

・この子ジム行けよ　絶対強くなるぞ

→おそらくキック経験者説濃厚

→でも女の子のローすげえ軽くなかった？

→こんだけ体格差あったら女の子の攻撃全部豆鉄砲なんですがそれは……

→そのあとのワンツー速すぎてビビった

→同士

→ちゃんと効いてるからセーフ
→ローキック使ったってだけだろ　総合とかムエタイの可能性もある
→逃げるときのダッシュかなり速かったから陸上かも
・次もどこかでバトルあったら見てえな
・これは都市伝説待ったなし

「こんなに広まっちゃうなんて……だって、あの時はこうするしかなかったから……！」
あの時の灯織はとにかく必死で、周りのことを気にしている余裕なんてなかった。高校生になってから初めての友達ができて、浮かれていた。そのせいで友達に怖い思いをさせてしまった。
「櫻木さんに謝らないと……あ、授業遅れちゃう……」
ドア一枚隔てて鳴り響く予鈴の音を聞き、灯織はようやく重い腰を上げる。
「八宮さんにも心配かけちゃったな……はあ、どうしていつも私って、ほんと……」
普段は心の中だけで済ませる一人反省会も全て口に出さないとやっていられないくらいに灯織は疲れていた。そして念のため水を流し、灯織はとぼとぼと女子トイレを後にする。その表情はまるで世界の終わりに直面したかのように重く、暗い。
「逮捕されるのは嫌だなあ……」
灯織は教室へと歩を進めながら、自分のストリートファイトが拡散されてしまった忌まわしき日のことを思い出していた。

第二話：風野灯織②

結局、灯織は一限が始まる直前に戻ってきた。しかし具合の悪さは相変わらずのようで、教室を出ていったときの暗い雰囲気は元に戻っていない。めぐるが授業中に灯織の席を盗み見しても、窓の外を眺めてぼんやりしているかと思えばいきなり頭を抱えてうなだれたり、シャーペンの芯を無意味に出し入れしたりしてどこか所在なさげだ。そして休み時間になるたびにスマホを眺めては表情をしかめ、かと思えば顔を赤くしたり青白くしたりと大忙しだ。いつものように文庫本を取り出したりイヤホンで音楽を聴いたりはしないようだ。

「……いや、所在なさげというより挙動不審？」

「どうしたのさめぐる」

「いや、なんでもないよ」

「そんなことより食堂行こうよ。早くしないと混んじゃうよ？」

「うーん……」

「めぐる？」

昼休みになってようやく灯織は動き出した。ちょうど昼休み開始から三分ほど経ったころだった。頭を抱えて机に突っ伏した姿勢をゆっくりと解いた灯織はスマホを制服のポケットにしまうと、ランチクロスに包まれた弁当と文庫本を持って席を立つ。そして、そのまま何かを決意したような硬い表情で教室を出ていった。誰も灯織のその行動を気にも留めていないようだった。めぐる自身灯織と特に仲がいいわけではなく、昼休みになるといつも友人に食堂へ誘われるため全く気にしたことがなかったが、他のクラスに友人がいるとかだろうか。普通に考えればその通りなのだが、あれが友達に会いに行くときの表情とは思えない。

「風野さん、どうしたんだろ……？」

「めぐる？みんな待ってるし、私先に行っちゃうからね！」

「あ……待ってよー！」

めぐるは一瞬灯織の後をつけようと考えたが、あの表情を見るからにただ友達と昼ご飯を食べるとか、そういうものではないのだろう。

きっと興味本位で着いていっていいものではないのだ。廊下のはるか遠くに見える灯織の小さな背中が階段へ向かう曲がり角に消えていく。後ろ髪をひかれる思いをしながらめぐるは食堂へ向かう友人の後を追った。

午後の授業が始まっても灯織が元気を取り戻すことはなかった。何度話しかけようと思っても直前でためらってしまい、やっとめぐるが灯織に話しかけることができたのは放課後になってからだった。校門を出たところで灯織の力ない背中が遠くを歩いているのを見かけためぐるは一瞬の逡巡の後、思い切って声をかけることにした。

「風野さーん！」

「ひゃいっ！って、八宮さん……？」

「ごめんね、驚かせちゃった？」

「大丈夫だから……」

「ならよかった！そういえば風野さん、この後ヒマ？」

「う、うん。ヒマだけど」

「じゃあさ、一緒にクレープ食べに行こ！」

「ええっ？」

めぐるは灯織の手を引っ張って走り出した。めぐるが掴んだそれは、とても人を殴っているとは思えないくらいに細くてきれいな手だった。

灯織とめぐるの二人は、公園のベンチでクレープを食べていた。

「クレープ屋って意外と並ぶんだね……」

「強引に連れてきちゃってごめんね。もしかして甘いもの嫌いだった？」

「いや、そんなこと……」

「体調とか大丈夫？」

「た、体調？」

「うん。朝、具合悪そうにしてたから」
「そうかな……」
ずいっと詰め寄るめぐるの圧に、灯織は思わずたじろぐ。
「今日一日、落ち着かないみたいだったけどなにかあったの？」
「……心配してくれるのは嬉しいけど、八宮さんには関係ないでしょ」
「あはは……そうだよね、ごめん」
「あっ……いや、その……」
灯織はなんとか場を取り繕おうとして口をもごもごさせるが、上手い言葉が出てこない。そのまま灯織は口をつぐんでしまい、気まずい沈黙が二人を覆う。どれくらいそうしていただろうか。根を上げためぐるが灯織に話しかけようとしたとき、二人の目の前にいきなり人影が現れた。
「おっ、いたぞ。こいつだな」
「こんなちんちくりんが……？」
「おい、本当にこいつがあの動画の女なのかよ」
目が痛いくらいの金髪の男とサングラスの男。そして帽子を被った赤いシャツの男の三人だ。三人ともその顔に下品な笑いを浮かべている。高校生だか大学生だかわからないが、不良に類するガラの悪い連中だということは分かる。
「行こう、八宮さん」
「う、うん」
「おーっと、逃がすと思ったか？」
ベンチから立ち上がった二人を不良達はじりじりと追いつめるように取り囲んでいき、めぐると灯織はついに公園の端まで追い詰められてしまう。さっきまで公園で遊んでいた子供やその保護者たちはもういない。この不良三人組が来た時に逃げてしまったのだろう。薄情だと思わずにはいられないが、自分が同じ立場だったらどうしているかわからない。めぐるが現実逃避のようにそんなことを考えていると、灯織が男たちの方を向いたまま話しかけてきた。
「落ち着いて、私の後ろに隠れて」
めぐるは灯織の後ろに身を隠す。そうすると少しだけ冷静さをと

り戻したような気分になった。相手は右に一人、左に一人、正面に一人だ。後ろは生垣でふさがれている。逃げ場はなさそうだ。
「どうしよう、囲まれちゃったよ……」
「……やるしかない」
「え？」
「……スタンスは肩幅の約１．５倍、そのまま右足を軸に左側へ腰から上を２／３回転……膝を楽に曲げてかかとを少し浮かせる……」
　灯織が小さな声で何かを言っているが、めぐるにはよく聞き取れなかった。しかし、それを見た瞬間めぐるは息を飲んだ。灯織の動きの手順が、めぐるにとっては非常に見慣れたものだったからだ。
「拳を軽く握って右拳を顎の右側、左拳は顎から２０センチくらいの位置……そして左肩を顎方向に少し入れる……！」
　それはボクシングの構えだった。最後に灯織は深呼吸をして、後ろに立つめぐるに小さな声で語り掛ける。
「……目の前に立ってる赤いシャツぶっ飛ばして逃げるよ。私のそばから絶対に離れないで」
「ははっ！こいつ、いっちょ前に構えてやがるよ！」
「あの野郎、こんな奴にやられたってのか？一発殴ればおとなしくなりそうじゃねえか」
「あんなに酷くやられた動画が拡散されたんじゃ恥ずかしくて街も歩けねえよなあ⁉」
　男たちの挑発を意に介すことなく、灯織は男たちに問いかける。
「あなたたち、あの人の仲間なんですか」
「はあ⁉仲間なんかじゃねえよ！俺たちがアイツを使ってやってるんだ」
「……そうですか」
　めぐるには、灯織と不良が何のことを話しているのかわからない。しかし不良は灯織を狙っていて、灯織はこのような状況に慣れているらしいということだけはわかった。リーダー格と思しき赤いシャツの不良と灯織は微動だにせずにらみ合っている。他の二人は動こうとしないで、逃げ道をふさぐように立っているだけだ。時間にしてほ

んの十秒後くらいだったと思う。根負けしたのか、灯織たちの正面に立っている赤シャツ不良が一歩踏み出した。その踏み出した足に合わせて灯織も飛び込んだ。灯織の左手が消え、ひゅん、ぱぱん、という音と共に赤シャツ不良がものすごい勢いでのけぞった。めぐるがそう認識したときにはもう終わっていた。

「うそ……」

灯織が人を殴った。淀みない動作で、自分に絡んできた不良を殴った。なんだか現実離れした光景だった。鼻血を出して倒れこんだ男と灯織の右手のフォロースルーを見て「あれはボクシングのワンツーだ」とぼんやりする頭でかろうじて理解しようとした瞬間、灯織に右手首をぎゅっと掴まれた。腕も指も細いのに見た目以上に力強い手だった。

「走って！」

我に返っためぐるは灯織に手を引かれて走り出す。振り返ってみても男たちが追いかけてくる気配はない。灯織に殴られた仲間を見て追いかける気をなくしたか。ともかく、灯織のおかげでなんとか助かったようだ。

「危なかった……」

走りながら灯織は安堵したようにつぶやいた。

二人は駅前の広場まで全力で走り続けた。ちょうど人々が帰宅し始める時間帯だったため駅構内の人通りはかなりのものだ。少なくともここにいればいきなり襲われることはないだろう。そう判断した二人は手ごろなベンチに腰を落ち着ける。

「……ここなら一人でも大丈夫そうだし、何か飲み物でも買ってくるよ」

「あっ……」

「ちょっと待ってて」
　座って早々に、灯織はめぐるをベンチに残して人ごみの中へ消えていく。引き留めようとしたがめぐるは何も話せなかった。息が上がっているということもあるが、それ以上に先ほどの喧嘩が衝撃的すぎて、まだ現実から帰ってきていないかのような妙な浮遊感がめぐるの心を包んでいたからだ。落ち着きを取り戻そうとめぐるは先ほどの喧嘩の内容を思い出す。灯織とクレープを食べていたら三人の不良が現れた。三人は明らかに灯織を狙っていた。灯織はそれを見て少し怯んだようだったがすぐに平静を取り戻し、ボクシングの右構えをとった。そして一歩踏み出した不良に向かってワンツーのコンビネーションを繰り出した。気が動転していたうえに速すぎてよくわからなかったが、あれは多分左ジャブと右ストレートだったと思う。それで不良をぶっ飛ばして逃げた。そういえば逃げるときに灯織が何か言っていた。たしか……
「八宮さん、お待たせ」
「えっ、ああ、ありがとう」
　すると、飲み物を買いに行っていた灯織が戻ってきた。灯織からペットボトルの麦茶を受け取っためぐるはそれを半分ほど一気に飲んでしまう。やはり灯織が隣にいると安心感が段違いだ。それに、喉を潤すと気分も落ち着いてきたようだ。緊張から解き放たれためぐるは、沈黙の時間を塗りつぶすように灯織に話しかけた。
「それにしても、さっきの喧嘩ほんとうに……」
　言いかけて、背中がぞわりとした。
　危なかった。逃げ出す際の灯織の何気ない一言を思い出し、めぐるはようやく、目の前で喧嘩が始まって終わったのだということに気が付いた。足元がふわふわする感覚が消え去って、嫌な汗が全身から噴き出るのを感じた。アレは喧嘩だったんだ。めぐるには灯織の一方的な展開に見えたけど、灯織にとっては危なかった喧嘩。めぐるが見た限りでは灯織はずっと冷静だった。かなり喧嘩慣れしているように見えたけど、実はさっきのはかなりギリギリの状況だったのではないか。もし灯織が負けていたらどうなっていただろうか。

「……ッ！」
　想像しようとして、やめた。あの不良達はめぐるが初めて対峙した「悪意を持って暴力を振るおうとする人間」だった。いくらめぐるがボクシングをやっているとはいえ、あのような状況では満足に動けるわけがない。試合を止めてくれる審判も、安全に配慮されたルールもない。常人ならばそれだけで体がすくみ上ってしまうだろう。
「八宮さん、大丈夫？」
「へ……？」
「いや、手が……」
「あっ！ああ、ごめん！」
　いつのまにか灯織の服のすそを強く握っていたようだ。慌てて離そうとするが握りこんだ指がうまく広がらない。灯織もそれを察したのか、それ以上何も言ってこなかった。めぐるが落ち着いたのを確認して灯織もペットボトルを開け、麦茶を飲み始める。こうしているとただの高校生にしか見えないのに、あれだけの技を持っているなんて。そしてその素晴らしい技術を喧嘩に使っているだなんて。背も大きくなくて、服の下はわからないが筋肉も細いように見える。こんな子があの動画の子と被って見えるだなんて、どう考えてもありえない。でも、どこか引っかかることがあるのも事実だ。意を決して、めぐるは鎌をかけて見ることにした。
「あのさ、やっぱりさっきの喧嘩って危なかったの……？」
「うん。三人には勝てない。相手が喧嘩慣れしてなくて助かったよ」
「あの渋谷で戦ってた大きい人とは互角だったのに？」
「いや、あれは一対一だったし向こうが油断してたから……あっ」
　灯織が一瞬だけ出した尻尾をめぐるは見逃さなかった。昨日から実はそうなんじゃないかと思っていた。公園で灯織のワンツーを直に見て、めぐるの疑念が確信に変わった。あんな速度のワンツーを放つことのできる人間はボクシング経験者の中でもめったにいない。あそこまで鍛え上げられた技術を何の躊躇もなく喧嘩に使うことのできる人間がいたとするならば、あの動画の少女以外には考えられない。めぐるは灯織にスマホの画面を見せる。そこに映っているのは

例の、渋谷での喧嘩の動画だ。
「これ、風野さんだよね……？」
「ッ……！」
灯織の表情が驚愕で塗りつぶされる。どうやら当たりだったみたいだ。
「なんでこんなことしたの？」
「こんなこと……って？」
「喧嘩のことだよっ！こんな大きな人と戦うなんて危ないよ！怪我どころじゃすまないよ……！」
灯織は気まずそうにうつむく。そして、重苦しそうに口を開いた。
「それは、友達を守るために……」
「友達？」
「うん。櫻木さんっていう……」
「櫻木さんって、私たちと同じクラスの？」
「そう。その櫻木さん」
「風野さんって櫻木さんと仲良かったんだ。知らなかった」
たしか、櫻木真乃……だったか。真乃も灯織と同じで、あまり目立つようなタイプではない。だからか、めぐるにとって二人が友達ということにさほど違和感はなかった。でも、目立たない二人がどうなったらあの渋谷の喧嘩に巻き込まれるんだろう。もしかして巻き込まれたんじゃなくてあの二人が原因なのか。そういえばやけに喧嘩慣れしてるみたいだったけど、どういうことなのだろうか。ていうか、そもそもあのワンツーの鋭さは何なんだ。聞きたいことがありすぎて固まってしまうめぐるをよそに、灯織はベンチから立ち上がる。
「……今日はもう遅いから送っていくよ」
「え、あ、ありがとう」
灯織の言葉に有無を言わせないような気迫が見て取れためぐるは聞きたかったことを飲み込んで立ち上がる。そうして駅を後にした二人は、なるべく人の多い場所を選びながら、すっかり暗くなった夜道を歩いた。灯織はこちらに一瞥もくれずに黙々と歩き続けている。いつも友達と並んで話しながら帰るめぐるにとってこれは少しつら

いものがあったが、灯織は何とも思っていないようだった。しかしあんな出来事に巻き込まれた後だということもあり、たとえ口を開いたとしても何を話したらいいのかめぐるにはよくわからなかった。前だけ向いて黙って歩き続ける灯織と、その少し後ろをうつむきがちに歩くめぐる。結局、家に着くまで二人の間で会話が交わされることはなかった。

「……今日はごめん。麦茶のお金は気にしなくていいから」
「そんな、悪いよ」
「いいから。今日の迷惑料ってことで」
「……わかった。ありがと」
「じゃあ、私はこれで」
「あ！ちょっと待って！」
　めぐるの家に着くや否や立ち去ろうとする灯織に、めぐるはほとんど反射的に声をかける。灯織が振り向いた。表情は夜の闇に紛れてよく見えない。それがなんだかこちらを急かしているようだった。聞きたいことはたくさんあるが、あまり長く引き留めるのも悪い。少し迷い、めぐるは灯織に一番聞きたかったことを口にした。
「あのさ、風野さん、大丈夫……なんだよね」
「私は大丈夫。八宮さんは自分の心配をした方がいいと思う。私の仲間って思われたかも」
「……うん。心配してくれてありがとう」
「じゃあ、私もう帰るね。八宮さんも、これから夜道を歩くときは気を付けて」
　それだけ言うと灯織はまた歩き出してしまう。今までめぐるの歩く速さに合わせてくれていたのだろう。早歩きをする灯織の背中はどんどん小さくなっていく。夜の闇に溶けるように遠ざかっていく灯織を見て自分でもよくわからない衝動に駆られためぐるは、その背中に向かって叫んでいた。

「風野さん！明日、お昼一緒に食べよう！」
「……へえっ!?」
今日一日振り回されたお返しだとばかりにめぐるは満面の笑みを灯織に向ける。こちらからは振り向いた灯織の顔は見えない。しかし灯織の上ずった返事を聞けば、向こうがどんな表情をしているかなんて想像に難くない。
「じゃあまた明日、学校でね！」
めぐるは灯織の返事を待たずに、我が家の玄関をくぐった。